

低く曇った空は、カーテンを開けなくても外がまた雨であることを知らせる。昨日梅雨入りしたとニュースになっていたが、千尋の記憶では数日前からずっと雨だ。

「あー……苦手な季節……」

陸上部でハードルの選手でもある千尋にとって、この時期は外での練習量が減るため苦手だった。明るいお日様のもと、のびのびと体を解放して走りたい。ハードルを跳んで、越えて、躍動して。走るスピードと先へ先へと求める気持ちがぴったり一緒になった瞬間がたまらない。梅雨はしばらく続くだろうから、今日もまた校舎内での練習になりそうだ。室内練習用のトレーニングシューズを持って学校へ向かう。

窓際の列、後ろから三番目。自分の席に着くと、ぱらぱらと教科書をめくる。一限は生物だ。いつもより暗い教室からほのかに明るいグラウンドを見下ろすと、なんとなく心もとない気持ちになる。灰色の水たまりがいくつもできて、そこに雨がぼちゃぼちゃと跳ねる。見るだけではいつも足りなくて、雨のときはその気配を感じたくなる。思い切り走れなくて不満なのに、こういう気持ちになるのは自分でも不思議だ。窓際の特権とばかりに少しだけ窓をあけると、たちまち湿気を含んだ風が入ってくる。もったりと肌を撫で、生ぬるい空気が髪をかき混ぜる。止められていないクリーム色のカーテンがひらひらと揺れて、千尋の顔にぎりぎり触れずにもとに戻る。

「――ぼ、久保！」

気付くと生物の担当教師である宮野がすぐ隣に立ってこちらを見ていて、ずっと外を見ていた千尋は思った以上に時間が経過していたことに驚いた。

「……聞いているか？」

「すみません」

「――俺は別にいいけど。プリントびしょぬれだぞ」

慌てて手元を見ると、いつの間にか風が強まって降りこんだ雨がノートを濡らし、配られたプリントがべったりと水分を含んで机に張り付いていた。我に返って窓を閉め、このプリントをどう復元しようか考える。慎重にはがしてみようとしたが、特に丈夫な紙ではないので濡れたところだけ机に残って破れてしまった。宮野をちらりと見たが、もう授業の内容に戻っているようで、千尋のことを気にするそぶりもない。カツカツと黒板に並ぶ整った文字を追いついて、急いでノートを書くことに集中した。

放課後はやはり、室内練習になった。筋力トレーニングをするチーム、校舎内をジョギング程度に走るチームに分かれて練習を開始する。千尋は体をほぐすストレッチのあと、ゆっくりと走り始めた。室内練習のときは仲間と連れ立って走るわけではなく、各々のペースで自分の体に集中して練習することになっていて、こうして走っていても一人だ。三階建ての校舎から渡り廊下で体育館や部室棟に繋がっていて、千尋はまず部室棟からスタートし、校舎の三階へ向かうことにした。東側の階段を上がり、西側の階段から降りるルートだ。一気に階段を上がり、三階の廊下の直線でスピードを気持ち上げる。きゅっ、きゅっ、とトレーニングシューズのゴムが廊下を踏みしめる音がする。呼吸を意識して、ただ無心に走る。同

じょうに一気に階段を降り、渡り廊下に出て体育館のほうへ。体育館の外周を一周したら、そのまま部室棟へ戻る。ひたすら同じルートを繰り返していると、だんだん心が落ち着いてくる。窓からちらりとグラウンドを見て、そこが雨でも、鬱々とした気分はなくなっていた。一階は職員室があるため明かりが灯っているが、三階は下校時刻をすぎてもう暗い。二階まで階段を降り、ふと顔を上げると、廊下の端にぼつんと灯る明かりを見た。たしか生物準備室だったはずだ。ちょうどいい、破れてしまったプリントを貰っておこう、そう思って寄り道することにした。

コンコン、と一応ノックはしたが、返事を待たずに扉を開けた。

「宮野せんせ、……」

思わずぱっと口に手をあて、声が漏れないようにする。宮野は椅子に座ったまま、腕組みをして眠っていた。自分で言うのも悲しいが、千尋は小柄だ。対して宮野は長身で、いつも立って授業をするので圧倒的に見上げることのほうが多い。こうして宮野を見下ろすのは初めてだった。すやすよと気持ちよさそうに居眠りをしていて、いつものとっつきにくい印象はなかった。仕事をしていた途中なのだろうか、資料が机の上に広がり、蛍光ペンが転がっている。机は窓際より少し手前にあり、窓からはイチョウの木が見えた。引き寄せられるように窓に近寄り、もっとよく見る。緑のすべすべとした葉が雨粒をのせ、銀色に輝いていた。すぐに重みに耐えきれなくなり、ふるっと葉を震わせて揺れる。雨粒はコロコロと転がり、遊んでいるようだ。じっと観察していると、背後から声をかけられてびくっとした。

「雨にでもなりたいのか」

振り返ると宮野が伸びをした姿勢のままこちらを見ていて、慌てて意識を戻す。宮野は寝起きだからか、いつもより少しだけ話しやすい感じがする。

「いやっ、えっと、そういうつもりではないです」

「雨だと授業中、途端にぼんやりしてるじゃねえか」

「バレてた？」

「バレバレだっつ。思ったより教卓からは見えてるんだよ、分かったらちゃんと集中してくれ」

「すみません……って、そうだ、プリントください」

「あ？」

「プリント！ 今日の。机からはがすとき失敗して破れた」

「お前な……」

「思ったより濡れてて驚いた。乾かしてもぜったいくちゃくちゃになってたと思う」

「あんだけ窓から外眺めてりゃ、そうなっても文句言えないだろうよ」

「だって雨のときって外見たくない？ 自分が濡れるのは嫌だけど、濡れていく景色は見たい、って思うんだよね」

「俺はどっちも嫌だ。雨嫌いなんだよ」

「そう？ でも先生は雨っぽい雰囲気だけだな。快晴よりも小雨って感じ」

軽く言ったけれど、宮野は眉間に皺を寄せてぎろりと千尋を睨んでくる。怒らせたようだ。
「……調子乗りました、すみません。プリントください」

そう言って両手を差し出すと、ふん、と笑ってプリントを渡してくる。

「そう言えばお前はここで何してたの」

「部活の途中でプリントのこと思い出して、扉開けたら先生が寝てたから、しばらく外見
た。ここ、イチョウが見えるんだね。雨が葉っぱの上を転がって、すんごいきれいな、銀
色で——」

ほら見て、と言いたかったけれど、宮野の顔がなぜか悲しそうではなかった。

サンプルはここまでです。

続きは書籍化し、2020年の文学フリマ大阪（九月六日開催）と、BLC（11月22日）にて
販売します。